

女性のライフスタイルに関する授業の効果分析 (1)

——キャリア意識に着目して——

藤 原 直 子*

Analysis of Changing career consciousness in Women's Studies Class

Naoko FUJIWARA

1 はじめに

本稿の目的は、筆者の担当する女性のライフスタイルに関する授業「ライフスタイルと人間関係」において、受講前後においてどのようなキャリア意識の変化がみられるのか、また授業の効果について、2011年度からの3年分の調査データを検討することを通して、授業改善およびキャリア教育の課題を見いだすことである。

学校教育におけるキャリア教育への取り組みは、1999年の文部科学省中央審議会答申(以下、中教審答申)「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」を端緒として、2000年代に入り、各学校段階において積極的に推進されている。その背景には、産業構造や就業構造の変化による、若者の早期離職や失業者の増加など、若者の就業状況が困難に直面していることが今後の社会の持続的発展にとって深刻な問題として提起されたこと、また学校教育において産業社会・職業社会に必要な人材の育成が十分にはできていないこと、すなわち「学校から社会・職業への移行」が円滑に行われていない状況に対する批判が高まったことが挙げられる。

2011年には、大学設置基準の改正により大学でのキャリア教育が義務化され、「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」(中教審)が答申された。そこでの「キャリア」とは、「人が生涯の中で様々な役割を果たす過程で、自らの役割の価値や自分と役割との関係を見いだしていく連なりや積み重ね」とされ、キャリア教育とは「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育」と定義されている。さらに、答申のなかでは発達段階に応じた体系的キャリア教育における高等教育段階での主な推進ポイントとして、「後期中等教育修了までを基礎に、学校から社会・職業への移行を見据え、教育課程の内外での学習や活動を通じ、高等教育全般においてキャリア教育を充実する」と示されている。これらの答申を受け、各大学はキャリア教育・キャリア支援の取り組みが本格化することになった。

*人間関係学科 教授

2 キャリア教育としての位置づけ

相山女学園大学では2011年度から「トータルライフデザイン教育」という名称で大学全体のキャリア教育を展開している。各学部で開講されているキャリアに関連した科目を「生涯キャリア科目群」「生活領域キャリア科目群」「実践キャリア科目群」という3つの科目群に配置し、学生に体系的に受講するよう薦めている。筆者の担当科目である「ライフスタイルと人間関係」は、現在「生涯キャリア科目群」に位置づいている。

この科目は、2003年のカリキュラムにおいて人間関係学部人間関係学科の専門科目のなかの学科共通科目B（1年次選択必修）「ライフスタイル論Ⅰ」として開講され、その後、2007年度のカリキュラム改正によって、現在の名称に変更し、学科共通科目（1年次選択必修）として位置づいている。受講生は、毎年100名前後である。2013年度は時間割の状況も影響したのか過去2年に比べて減少している（表2参照）。受講生は、9割が1年生であり、2年生以上も受講している。授業内容は、資料データに関しては最新のデータに変更しつつ、ここ3年間は以下（表1）に示す内容を維持している。授業9回目以降のゲストスピーカーは人間関係学部の卒業生にお願いし、なるべく20代前半、20代半ば、20代後半、30代前半、30代半ばの卒業生の順に話してもらうことで時間の流れをイメージできるようにしている。

ゲストスピーカーには、①大学時代をどう過ごしたか、②就職活動について、③現在の仕事

表1 「ライフスタイルと人間関係」授業計画

授業テーマ	じぶんの生き方と人間関係との関わりについて考える
授業の到達目標	学ぶことや働くことの意義を理解し、今後の生き方、将来展望についての考えを構築する
授業内容	<p>この授業では、「女性」を取り巻く状況を客観的に理解し、これから生きていく上で直面する課題やそれへの対処の仕方、「女性」の多様な生き方について、生涯発達・人間関係という視点から学ぶことを通して、自分の生き方についての考えを構築していくことをねらいとする。授業ではワークシート作成など受講生の自主作業を中心に進める。また今後の生き方を考えるために数名のゲストスピーカーを招く。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. イントロダクション 2. ワーク1 これまでの自分をふりかえる 3. ワーク2 いまの自分を知ろう 4. 女性の取り巻く社会状況の変化（データから読み解く） 5. 女性の取り巻く社会状況の変化（データから読み解く） 6. ワーク3 女性が働く環境の変化・均等法世代の女性たち 7. ワーク4 ライフスタイルを考える 8. 自分の生き方と人間関係 9. ゲスト・スピーク&質疑応答（Aさん：工作機械メーカー人事部） 10. ゲスト・スピーク&質疑応答（Bさん：製紙業メーカー事務） 11. ゲスト・スピーク&質疑応答（Cさん：アパレルメーカーから転職、銀行契約社員） 12. ゲスト・スピーク&質疑応答（Dさん：自動車メーカー 営業職） 13. ゲスト・スピーク&質疑応答（Eさん：妊娠・出産や難病の子どもの子育てについて講演） 14. ゲスト・スピーク&質疑応答（Fさん：食品メーカー事務から転職、幼稚園教諭。仕事と子育ての両立について講演） 15. まとめ

内容・やりがい・苦勞について、④今後のライフスタイル展望について、⑤後輩へのメッセージという内容で約1時間の講演をお願いしている。毎回の講演後に質疑応答を行い、感想およびゲストスピーカーへのメッセージを記入する時間をとっている。2011年度からの3年間は1名の変更を除き、同じ卒業生に講演してもらっている。

3 調査の概要

(1) 調査の方法

「ライフスタイルと人間関係」の受講者に対し、受講後のキャリア意識の変化をみるための質問紙調査を行った。ここでのキャリア意識とは、以下に示すキャリアに関する志向性に着目したものである。質問紙は、岡田龍樹(2009)が行ったキャリア意識調査を利用した¹。その質問紙は、梅澤正(2007)²がキャリア教育に関わる教職員を対象として、学生に卒業後10年間の生活信条として期待するキャリアマインド(キャリア志向)を洞察するために作成したセルフチェックシートを、学生自身が回答できるように問いを変え、各項目を5段階で評価するものである。

各項目に「非常に大切だと思う」を5ポイント、「まったく大切だとは思わない」を1ポイントとして計算し、20項目すべてに「非常に大切だと思う」と回答した場合、100ポイントとなる。さらに梅澤は、項目を「自己完遂への意志」「仕事充実志向」「自己発展への意識と能力開発」「関係性の確立」の4つのテーマに分け、各テーマにおける満点は25ポイントである。質問項目は以下のとおりである。

「自己完遂への意志」

- 1 自分の人生に誇りと自信がもてる生き方をする。
- 3 可能性を求めているいろいろなトライしてみる
- 4 自分の持ち味を探し、個性的な生き方をする
- 9 いろいろな人の、多彩な生き様について学ぶ
- 14 成り行きに流されないよう信念をもって生きる

「仕事充実志向」

- 2 生涯を通してやっていきたい、自分のライフワークをもつ
- 5 責任ある仕事やポストに任されるようにする
- 13 仕事の中に、自分の潜在可能性をフルに発揮する
- 16 挑戦しがいのある仕事を探し求める
- 17 不断に職業的能力の開発につとめる

「自己発展志向」

- 6 幅広い興味と関心をもって、知識の習得につとめる
- 7 変化する客観的状況を、自分の生き方・働き方の中に取り込む
- 8 人間としての個人的成長もこころがける
- 10 当面のことにとらわれず、将来を見据えて生きる
- 12 自分がやりたいことに、時間と金を重点的に配分する

「関係性の確立」

- 11 自分のビジョン、使命感と役割意識をもって生きる
- 15 社会生活において、公共心や社会的マナーを守る

- 18 職場において良好な人間関係を築くようにつとめる
- 19 友人や知人と親しく交際し、交流する
- 20 周囲の人びとの発言内容や気持ちに耳を傾ける

調査は、同じ質問紙を用い、授業初回時に第1回調査、授業最終回に第2回調査を行い、いずれも授業時間内に配布回収した。

(2) 回収状況

各調査の有効回収数は表2のとおりである。この授業は授業最終時にレポート記入を行うことを周知しているため、ほとんどの学生が出席しており、9割以上の回収となった。

表2 各調査の有効回収数

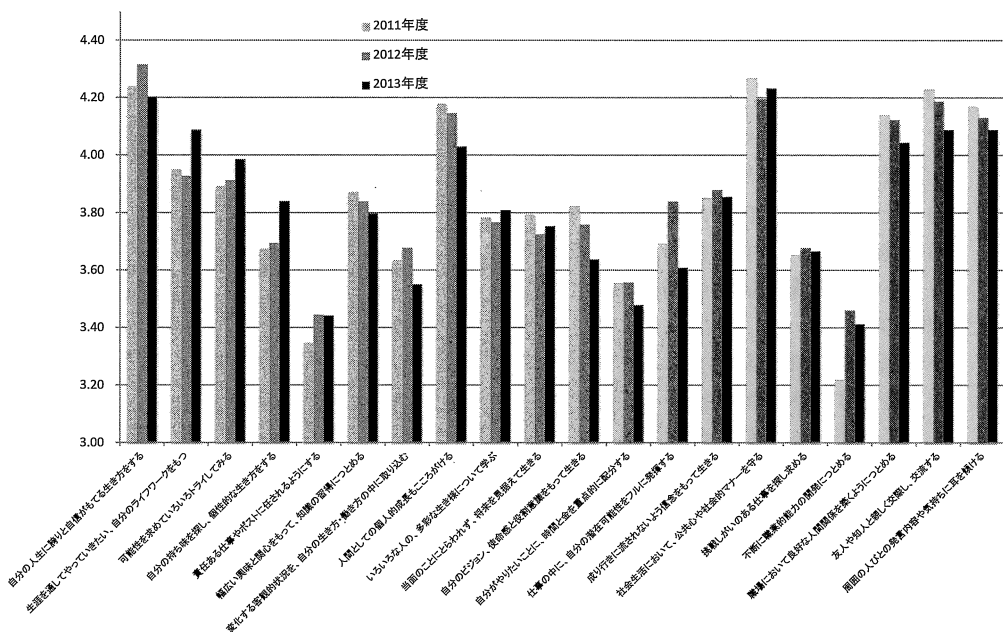
	2011年度	2012年度	2013年度
第1回	106名	124名	69名
第2回	104名	103名	70名
受講登録者数	118名	134名	78名

4 調査結果

授業初回時の結果と3年間の推移を示したものが表3である。まずは授業初回時の3年間の変化を示し、つぎにテーマごとの平均点および受講後の変化、そして各年度の結果についてみていく。

4-1 授業初回時の意識の推移

グラフ1 授業初回時の意識の推移



グラフ1をみると、授業開始時(1年次4月時点)の全体的な傾向としては「Q1.自分の人生に誇りと自信がもてる生き方をする」、「Q15.社会生活において、公共心や社会的マナーを守る」、「Q19.友人や知人と親しく交際し、交流する」という項目のポイントがほぼ4.20以上となり、とくに高い。また、「Q18.職場において良好な人間関係を築くようにつとめる」、「Q20.周囲の人々との発言内容や気持ちに耳を傾ける」、「Q8.人間としての個人的成長もこころがける」の得点も高いことから、授業開始時においては自己の成長に関する意識や職場や周囲の人々との人間関係について「非常に大切」と考えている割合が高いことが示されている。一方、「Q5.責任ある仕事やポストを任されるようにする」、「Q17. 不断に職業的能力の開発につとめる」という項目は3.50以下とポイントが低く、仕事充実への志向性が低いことがわかる。

3年間を比較した意識の変化としては、「Q2.生涯を通してやっていきたい、自分のライフワークをもつ」(3.95<3.93<4.09)「3.可能性を求めているいろいろなトライしてみる」(3.89<3.91<3.99)「Q4.自分の持ち味を探し、個性的な生き方をする」(3.67<3.69<3.84)といった項目が年々高くなっている。一方、「Q8.人間としての個人的成長もこころがける」(4.18>4.15>4.03)「Q11.自分のビジョン、使命感と役割意識をもって生きる」(3.82>3.76>3.64)という項目は年々低下傾向にある。「Q18.職場において良好な人間関係を築くようにつとめる」(4.14>4.12>4.04)、「Q19.友人や知人と親しく交際し、交流する」(4.23>4.19>4.09)、「Q20.周囲の人々との発言内容や気持ちに耳を傾ける」(4.17>4.13>4.09)といった関係性志向に関わる項目は他に比べて得点は高いが、やや低下傾向にある。このように、自分なりの人生を充実させようとする意識は高くなっている、その一方で仕事における充実や自己能力の開発に関する要素に関して低下傾向にあることがうかがえる。

4-2 テーマごとの平均点とその推移

次に、4つのテーマに関しての変化を示したものが表4である。

表3は、テーマ別の平均点の変化である。各年度とも得点が受講前後ともに一番高いのは「関係性確立志向」であり、順に「自己完遂志向」→「自己発展志向」→「仕事充実志向」となる。

2011年度は、受講後にすべてのテーマについて平均点が上昇しており、「自己完遂志向」が0.95ポイントと上げ幅が一番大きい。2012年度の受講前後の変化は、「自己完遂志向」0.83、「関係性確立志向」0.51、「自己発展志向」0.36、と上がっている。しかし、「仕事充実志向」(18.35>18.08)は0.27ポイント低下している。2013年度に関しては、「関係性志向」0.43、「自己発展志向」0.33、「自己完遂志向」0.15と上昇ポイントも小さく、「仕事充実志向」は0.56ポイントと著しく低下している。

3年間の変化をみていくと、「関係性志向」と「自己発展志向」については受講後の上昇ポイントにほとんど変化はみられないが、「自己完遂志向」「仕事充実志向」については年々、受講後の平均点および上昇ポイントも低下傾向にある。とくに「仕事充実志向」に関しては、2012、2013年度において受講後の得点が低くなっている(18.35→18.08, 18.22→17.66)。

受講生のキャリア意識においては、友人や職場の人間関係やその構築に意識が高く、それらを今後の人生の課題として重要視していることがうかがえる。同様に、「Q15.社会生活上の公共心や社会的マナーを守ること」に関しても高い得点を示しており、社会を生きる上での自己規律の高さは重要だと考えている。その一方で、「Q11.自分のビジョンや使命感と役割意識をもって生きること」に関しては得点が低く、社会と自己との関係性についての意識は人間関係への意識ほど高くはないことが示されている。

表3 テーマごとの平均点と推移

		2011年度				2012年度				2013年度			
		第1回		第2回		第1回		第2回		第1回		第2回	
自己完遂志向	1	4.24		4.28		4.31		4.29		4.20		4.33	
	3	3.89		4.16		3.91		4.17		3.99		3.93	
	4	3.67	19.43	3.93	20.38 (0.95)	3.69	19.56	3.93	20.39 (0.83)	3.84	19.69	3.77	19.84 (0.15)
	9	3.78		3.94		3.77		3.95		3.81		3.87	
	14	3.85		4.06		3.88		4.05		3.86		3.94	
仕事充実志向	2	3.95		4.01		3.93		4.02		4.09		3.94	
	5	3.35		3.29		3.44		3.30		3.44		3.26	
	13	3.69	17.86	3.80	18.08 (0.22)	3.84	18.35	3.80	18.08 (-0.27)	3.61	18.22	3.67	17.66 (-0.56)
	16	3.65		3.60		3.68		3.57		3.67		3.56	
	17	3.22		3.38		3.46		3.39		3.41		3.23	
自己発展志向	6	3.87		3.91		3.84		3.89		3.80		3.90	
	7	3.63		3.75		3.68		3.74		3.55		3.67	
	8	4.18	19.02	4.20	19.35 (0.33)	4.15	18.94	4.19	19.30 (0.36)	4.03	18.61	4.19	18.94 (0.33)
	10	3.79		3.73		3.73		3.73		3.75		3.61	
	12	3.55		3.76		3.56		3.75		3.48		3.57	
関係性確立志向	11	3.82		3.78		3.76		3.78		3.64		3.67	
	15	4.27		4.28		4.20		4.29		4.23		4.26	
	18	4.14	20.63	4.23	20.88 (0.25)	4.12	20.39	4.22	20.90 (0.51)	4.04	20.09	4.16	20.52 (0.43)
	19	4.23		4.31		4.19		4.32		4.09		4.30	
	20	4.17		4.28		4.13		4.29		4.09		4.13	

「自己完遂志向」に関しては、2013年度において受講開始時の得点が過去2年よりも高いこともあってか (19.43<19.56<19.69)、受講後の変化は小さくなっている (0.95>0.83>0.15)。前述したように、「Q1. 自分の人生に誇りと自信がもてる生き方をする」は全体として得点が毎年高い値を示している。また、「Q3. 可能性を求めているいろいろトライしてみる」「Q4. 自分の持ち味を探し、個性的な生き方をする」の項目に関しては、受講開始時の得点は上昇傾向にあり、受講後も上昇しているが2013年度に関しては下がっている。「Q9. いろいろな人の、多彩な生き様について学ぶ」「Q14. 成り行きに流されないよう信念をもって生きる」の項目が受講後にポイントが高くなる理由の一つには、ゲストの多様な生き方や働き方の話を聞くという経験、さらに卒業生ゲストの多くが、学生時代にはいろいろなことに挑戦し多様な経験を積むことを後輩へのメッセージとして伝えていることが大きく影響しているように思われる。

データから目立って読み取れるのは、「仕事充実志向」の得点が年々低下しているのが顕著であり、受講開始時に比べ、受講後の得点が低下している (0.22> -0.27> -0.56) ことである。項目でみると、「Q17. 不断に職業的能力の開発に努める」「Q5. 責任あるポストに任される」という項目の得点が低く、「Q13. 仕事の中に自分の潜在性をフルに発揮する」のポイント下降 (3.80>3.80>3.67) が著しいことから、職業生活上で自己の能力を発揮するという意識が低くなっている様子がうかがえる。授業効果という点で、生きていく中での働くことの重要性、仕事のやりがいや可能性、職業的能力の不断の努力等に関する観点を強化していくことが示唆さ

れる。

「自己発展志向」の得点の変化をみても低下傾向（19.35>19.30>18.94）にあるが、受講前と受講後の変化に関しては、3年間でほぼ同じ割合で上昇している（0.33→0.36→0.33）。項目でみると、「Q10.当面のことにとらわれず、将来を見据えて生きる」の変化（-0.06→±0.00→-0.04）以外は、受講後に上昇している。「Q8.人間としての個人的成長もここがける」の項目は受講前後とも高い得点率を維持している。前掲したシラバスにあるように、授業の前半に女性を取り巻く社会状況の変化、とくに女性の多様な生き方や働き方のデータを読み解く作業を行っている。それらの作業が「Q6.幅広い興味と関心をもって、知識の習得につとめる」「Q7.変化する客観的状況を、自分の生き方・働き方の中に取り込む」ことに多少なりともつながっているのではないと思われる。

テーマごとの平均点とその推移からは、「仕事充実」の志向性を高める授業内容・授業展開の工夫が必要であることが課題として見出された。

4-3 各年度における平均点および変化

表4 2011年度 各項目の平均点および変化

		第1回	第2回	平均点の差
		126名	123名	
1	自分の人生に誇りと自信がもてる生き方をする。	② 4.24	② 4.28	0.04
3	可能性を求めているいろいろなトライしてみる	3.89	4.16	0.27
4	自分の持ち味を探し、個性的な生き方をする	3.67	3.93	0.26
9	いろいろな人の、多彩な生き様について学ぶ	3.78	3.94	0.16
14	成り行きに流されないよう信念をもって生きる	3.85	4.06	0.37
2	生涯を通してやっていきたい、自分のライフワークをもつ	3.95	4.01	0.06
5	責任ある仕事やポストに任されるようにする	② 3.35	① 3.29	-0.06
13	仕事の中に、自分の潜在可能性をフルに発揮する	3.69	3.80	0.11
16	挑戦しがいのある仕事を探し求める	3.65	3.60	-0.05
17	不断に職業的能力の開発につとめる	① 3.22	② 3.38	0.12
6	幅広い興味と関心をもって、知識の習得につとめる	3.87	3.91	0.04
7	変化する客観的状況を、自分の生き方・働き方の中に取り込む	3.63	3.75	0.12
8	人間としての個人的成長もここがける	4.18	4.20	0.02
10	当面のことにとらわれず、将来を見据えて生きる	3.79	3.73	-0.06
12	自分がやりたいことに、時間と金を重点的に配分する	3.55	3.76	0.21
11	自分のビジョン、使命感と役割意識をもって生きる	3.82	3.78	-0.04
15	社会生活において、公共心や社会的マナーを守る	① 4.27	② 4.28	0.01
18	職場において良好な人間関係を築くようにつとめる	4.14	4.23	0.09
19	友人や知人と親しく交際し、交流する	4.23	① 4.31	0.08
20	周囲の人びとの発言内容や気持ちに耳を傾ける	4.17	② 4.28	0.11
	計	76.94	78.68	1.74

2011年度の総得点の平均は第1回調査では76.94ポイント、第2回調査では78.68ポイントであり、伸び率は1.74ポイントと他年度と比較すれば高い値を示している。項目別の平均点を見れば、第1回調査では「Q15. 社会生活において、公共心や社会的マナーを守る」(4.27)を最高点として、「Q1. 自分の人生に誇りと自信がもてる生き方をする」(4.24)「Q19. 友人や知人と親しく交際し、交流する」(4.23)と続く。低い得点の項目は、「Q17. 不断に職業的能力の開発につとめる」(3.22),「Q5. 責任ある仕事やポストに任されるようにする」(3.55)であった。

第2回調査では、Q19 (4.31) Q1 (4.28) Q15 (4.28),「Q20. 友人や知人と親しく交際し、交流する」(4.28)の得点が高く、Q5 (3.29) Q17 (3.38)の得点が低かった。伸び率の高い項目は、「Q3. 可能性を求めているいろいろなトライしてみる」(0.27),「Q4. 自分の持ち味を探し、個性的な生き方をする」(0.26)であった。第2回調査時に低下した項目はQ5 (-0.06),「Q10. 当面のことにとらわれず、将来を見据えて生きる」(-0.06),「Q16. 挑戦しがいのある仕事を探し求める」(-0.05),「Q11. 自分のビジョン、使命感と役割意識をもって生きる」(-0.04)の4項目であった。

表5 2012年度 各項目の平均点および変化

			第1回	第2回	平均点の差
			123名	102名	
1	自分の人生に誇りと自信がもてる生き方をする。	1	① 4.31	② 4.29	-0.02
3	可能性を求めているいろいろなトライしてみる	3	3.91	4.17	0.25
4	自分の持ち味を探し、個性的な生き方をする	4	3.69	3.93	0.24
9	いろいろな人の、多彩な生き様について学ぶ	9	3.77	3.95	0.19
14	成り行きに流されないよう信念をもって生きる	14	3.88	4.05	0.17
2	生涯を通してやっていきたい、自分のライフワークをもつ	2	3.93	4.02	0.09
5	責任ある仕事やポストに任されるようにする	5	① 3.44	① 3.30	-0.14
13	仕事の中に、自分の潜在可能性をフルに発揮する	13	3.84	3.80	-0.04
16	挑戦しがいのある仕事を探し求める	16	3.68	3.57	-0.10
17	不断に職業的能力の開発につとめる	17	② 3.46	② 3.39	-0.07
6	幅広い興味と関心をもって、知識の習得につとめる	6	3.84	3.89	0.05
7	変化する客観的状況を、自分の生き方・働き方の中に取り込む	7	3.68	3.74	0.06
8	人間としての個人的成長もこころがける	8	4.15	4.19	0.05
10	当面のことにとらわれず、将来を見据えて生きる	10	3.73	3.73	0.00
12	自分がやりたいことに、時間と金を重点的に配分する	12	3.56	3.75	0.19
11	自分のビジョン、使命感と役割意識をもって生きる	11	3.76	3.78	0.02
15	社会生活において、公共心や社会的マナーを守る	15	② 4.20	② 4.29	0.10
18	職場において良好な人間関係を築くようにつとめる	18	4.12	4.22	0.10
19	友人や知人と親しく交際し、交流する	19	③ 4.19	① 4.32	0.13
20	周囲の人びとの発言内容や気持ちに耳を傾ける	20	4.13	② 4.29	0.16
		計	77.27	78.67	1.40

2012年度の総得点の平均は第1回調査では77.27ポイント、第2回調査では78.67ポイントであり、伸び率は1.40ポイントである。項目別の平均点を見れば、第1回調査では「Q1. 自分の

女性のライフスタイルに関する授業の効果分析 (1)

人生に誇りと自信がもてる生き方をする」(4.31)を最高点として、「Q15. 社会生活において、公共心や社会的マナーを守る」(4.20)「Q19. 友人や知人と親しく交際し、交流する」(4.19)と続く。低い得点の項目は、「Q5. 責任ある仕事やポストに任されるようにする」(3.44),「Q17. 不断に職業的能力の開発につとめる」(3.46)であったが、2011年度よりも高くなっている。

第2回調査では、Q19 (4.32) Q1 (4.29) Q15 (4.29),「Q20. 友人や知人と親しく交際し、交流する」(4.29)の得点が高く、Q5 (3.30) Q17 (3.39)の得点が低かった。伸び率の高い項目は、「Q3. 可能性を求めているいろいろトライしてみる」(0.25),「Q4. 自分の持ち味を探し、個性的な生き方をする」(0.24)であった。第2回調査時に低下した項目はQ5 (-0.14) Q17 (-0.07)「Q16. 挑戦しがいのある仕事を探し求める」(-0.10),「Q13. 仕事の中に、自分の潜在可能性をフルに発揮する」(-0.04), Q1 (-0.01)の5項目であった。2011年度と同様に、「仕事充実志向」のポイントが低下している。

表6 2013年度 各項目の平均点および変化

		第1回	第2回	
		69名	70名	平均点の差
1	自分の人生に誇りと自信がもてる生き方をする。	② 4.20	① 4.33	0.13
3	可能性を求めているいろいろトライしてみる	3.99	3.93	-0.06
4	自分の持ち味を探し、個性的な生き方をする	3.84	3.77	-0.07
9	いろいろな人の、多彩な生き様について学ぶ	3.81	3.87	0.06
14	成り行きに流されないよう信念をもって生きる	3.86	3.94	0.09
2	生涯を通してやっていきたい、自分のライフワークをもつ	4.09	3.94	-0.14
5	責任ある仕事やポストに任されるようにする	② 3.44	② 3.26	-0.18
13	仕事の中に、自分の潜在可能性をフルに発揮する	3.61	3.67	0.06
16	挑戦しがいのある仕事を探し求める	3.67	3.56	-0.11
17	不断に職業的能力の開発につとめる	① 3.41	① 3.23	-0.18
6	幅広い興味と関心をもって、知識の習得につとめる	3.80	3.90	0.10
7	変化する客観的状況を、自分の生き方・働き方の中に取り込む	3.55	3.67	0.12
8	人間としての個人的成長もこころがける	4.03	4.19	0.16
10	当面のことにとらわれず、将来を見据えて生きる	3.75	3.61	-0.14
12	自分がやりたいことに、時間と金を重点的に配分する	3.48	3.57	0.09
11	自分のビジョン、使命感と役割意識をもって生きる	3.64	3.67	0.03
15	社会生活において、公共心や社会的マナーを守る	① 4.23	③ 4.26	0.03
18	職場において良好な人間関係を築くようにつとめる	4.04	4.16	0.12
19	友人や知人と親しく交際し、交流する	③ 4.09	② 4.30	0.21
20	周囲の人びとの発言内容や気持ちに耳を傾ける	③ 4.09	4.13	0.04
	計	76.62	76.96	0.34

2013年度の総得点の平均は第1回調査では76.62ポイント、第2回調査では76.96ポイント、伸び率は0.34ポイントと過去2年に比べ低下している。項目別の平均点を見れば、第1回調査では「Q15. 社会生活において、公共心や社会的マナーを守る」(4.23)を最高点として、「Q1. 自分の人生に誇りと自信がもてる生き方をする」(4.20),「Q2. 生涯を通してやっていきたい、

自分のライフワークをもつ」(4.09)「Q19. 友人や知人と親しく交際し、交流する」(4.09), 「Q20. 周囲の人々の発言内容や気持ちに耳を傾ける」(4.09)と続く。低い得点の項目は, 「Q5. 責任ある仕事やポストに任されるようにする」(3.44)「Q17. 不断に職業的能力の開発につとめる」(3.41)となり, 2012年度と同様であった。

第2回調査では, Q1 (4.33) Q19 (4.30) Q15 (4.26) の得点が高く, Q17 (3.23) Q5 (3.26) の得点が低かった。2回調査の変化としては, Q19 (0.21) が最も高く, 「Q8. 人間としての個人的成長もこころがける」(0.16)と続くが, 過去2年に比べると伸び率も低い。第2回調査時に低下した項目はQ5 (-0.18) Q17 (-0.18) Q2 (-0.14)「Q10. 当面のことにとらわれず, 将来を見据えて生きる」(-0.14)「Q16. 挑戦しがいのある仕事を探し求める」(-0.11), 「Q4. 自分の持ち味を探し個性的な生き方をする」(-0.07)「Q2. 生涯を通してやっていきたい, 自分のライフワークをもつ」の7項目であった。Q2, 3, 4に関しては, 2回の調査時に少し低下しているものの得点としては高い。しかしながら, 2013年度に関しても過去2年間同様に, 「仕事充実志向」のポイント(Q5, Q16, Q17)が低下していると同時に下げ幅も大きい。また, Q10もポイントを下げっており, 仕事上での自己発揮, 職業的能力の持続的な努力, 責任ある役割への志向といった「仕事充実志向」が低下傾向にあることが示されている。

以下の表7は, 3年間の項目ごとの平均点と変化をまとめて示したものである。

表7 各年度の項目ごとの平均点と変化

	2011年度			2012年度			2013年度		
	第1回	第2回		第1回	第2回		第1回	第2回	
1	① 4.31	② 4.29	0.04	① 4.31	② 4.29	-0.02	② 4.20	① 4.33	0.13
3	3.91	4.17	0.27	3.91	4.17	0.25	3.99	3.93	-0.06
4	3.69	3.93	0.26	3.69	3.93	0.24	3.84	3.77	-0.07
9	3.77	3.95	0.16	3.77	3.95	0.19	3.81	3.87	0.06
14	3.88	4.05	0.21	3.88	4.05	0.17	3.86	3.94	0.09
2	3.93	4.02	0.06	3.93	4.02	0.09	4.09	3.94	-0.14
5	① 3.44	① 3.30	-0.06	① 3.44	① 3.30	-0.14	② 3.44	② 3.26	-0.18
13	3.84	3.80	0.11	3.84	3.80	-0.04	3.61	3.67	0.06
16	3.68	3.57	-0.05	3.68	3.57	-0.10	3.67	3.56	-0.11
17	② 3.46	② 3.39	0.12	② 3.46	② 3.39	-0.07	① 3.41	① 3.23	-0.18
6	3.84	3.89	0.04	3.84	3.89	0.05	3.80	3.90	0.10
7	3.68	3.74	0.12	3.68	3.74	0.06	3.55	3.67	0.12
8	4.15	4.19	0.02	4.15	4.19	0.05	4.03	4.19	0.16
10	3.73	3.73	-0.06	3.73	3.73	0.00	3.75	3.61	-0.14
12	3.56	3.75	0.21	3.56	3.75	0.19	3.48	3.57	0.09
11	3.76	3.78	-0.04	3.76	3.78	0.02	3.64	3.67	0.03
15	② 4.20	② 4.29	0.01	② 4.20	② 4.29	0.10	① 4.23	③ 4.26	0.03
18	4.12	4.22	0.09	4.12	4.22	0.10	4.04	4.16	0.12
19	③ 4.19	① 4.32	0.08	③ 4.19	① 4.32	0.13	③ 4.09	② 4.30	0.21
20	4.13	② 4.29	0.11	4.13	② 4.29	0.16	③ 4.09	4.13	0.04
計	76.94	78.68	1.74	77.27	78.67	1.40	76.62	76.96	0.34

5 今後の授業展開の課題

本論の目的は、授業をとおして受講生のキャリア意識にどのような変化がみられるのか、授業の効果をみることであった。そこで、同授業で初回時と終了時の2回の調査を行い、その結果の単純集計結果の推移から全体の傾向について見てきた。ただ、岡田も指摘しているように、今回の2回の調査において回答者数が異なることや個々の学生の出席状況を出席簿で確認できるとはいえ、調査結果を比較検討することは正確には難しい面がある。さらに、この授業だけの影響とも限らず、そのほかの受講科目や人間関係学部全体の学部教育の効果もあるであろう。それを前提とした上で、今回の調査から見出された授業効果と今後の課題について述べておきたい。

2011年度から3年間の受講生の授業開始時のキャリア意識は、「誇りと自信」をもった生き方は大切で、公共心や社会的マナーを守ることでも大事、そして職場も含め周囲の人間関係を良好に築き交流することは非常に大切だという意識が高いことがうかがえる。その一方で、仕事上で自己の能力を発揮し、職業的能力の開発につとめることについては意識が低いことが示された。また、3年間の平均点の推移からは、生涯を通したライフワークの大切さ、可能性を求めて挑戦すること、自分の持ち味を活かした生き方などに関する意識は年々上昇傾向にある。その反面、人間としての個人的成長をこころがけ、自分のビジョン、使命感と役割意識を持って生きること、また仕事の中に自分の潜在可能性をフルに発揮することに関する意識はやや低下しつつある。

これらの結果は、調査時が大学一年生の4月ということもあり、就職することや働いている自分とその生活に対するイメージがまだ漠然としているために、仕事充実の志向性が高くないとも考えられる。さらに、今回の調査結果について厳密に関連づけることはできないが、近年の社会状況の変化も少なからず反映していると思われる。大学卒業後の就職状況が厳しく、「シューカツは大変だ」というイメージが広がっているなかで、自分の能力がどう就職につながるのか、すなわち仕事上の職業能力の開発、責任ある仕事やポストを任されるようになるといった仕事充実志向に想像が及ぶのは難しいことなのかもしれない。

2011年度の回答学生は就職活動が3年生12月に開始であったが、2012年度学生からは、3年時の3月となり2013年度学生は、授業期間中にそのことを意識させられるなど、社会状況の変化は学生の意識に影響を与えていると推測される。

学生がおかれた状況も前提としながら、授業を通した意識の変化をみていくと、「仕事充実志向」以外の「関係性志向」「自己完遂志向」「自己発展志向」に関してはポイントを上げている。「ライフスタイルと人間関係」という授業科目であるので、授業前半において、自分がどのような人たちと出会い、どのような人間関係を構築し、それがいまの自分にどのような影響を与えたか、いまの自分はどのようなことを大切にしたいと考えるかなど、これまでの自分を振り返る作業を行っている。その作業が、今後のキャリア形成において重要であるという認識を新たにする機会となったのかもしれない。

また、授業後半でのゲストスピーカーの話から、それぞれの学生時代の経験、就職活動の状況、仕事のやりがいや苦勞、恋愛・結婚・出産・育児などのライフイベントに関する経験や考え方など、多様なライフスタイルについて「生の声」を聞くという経験が受講生にとって大きく影響していると思われる。さらに自学部の卒業生という点で、ゲストの話をより身近に感じることができるのではないだろうか。

毎回のゲスト講演授業後半での質疑応答は、筆者がマイクを持って机間を回りながら指名して行うことが多い。受講生から毎回共通して出てくる質問の内容は、授業という枠を意識して最初は「仕事をしているうえで苦労していること、それをどう乗り越えているか」「学生時代に資格をとっておいた方がよいか」など就職に関わる事が出されるが、教室の場が和むにつれ、各ゲストの恋愛・結婚・出産・育児などのライフイベントの経験や考え方に関する内容が多く出され、今後のキャリアにおけるライフイベントへの関心の高さがうかがわれる。ゲストの学生時代や現在の生活でのいろいろな体験などの話を聞くこと、また学生時代にさまざまなことに挑戦し多様な経験を積むようにとの先輩からのメッセージを受け取ることで、「自己完遂志向」や「自己発展志向」のポイントを上げた効果があったと推測される。

今回の調査結果が示す「仕事充実志向」の得点が受講後に低下していることから、前述したように、生き方と働くこととの意味連関や仕事上の自己の発揮をどうとらえ、意識化していくかといった要素に重点をおいた授業展開の必要性が課題として示された。もちろん、一つの授業のみで学生のキャリア意識が大きく変化するとは考えにくい。近年の高等教育におけるキャリア教育施策と各大学で実際に行われているキャリア教育についてここで論じることはしないが、今後の社会を担う人材を育成するという意味においてキャリア教育の意義は大きいと考える。ひるがえって、筆者自身の授業実践において、年度が進むにつれて、受講後に低下するポイントが多くなっている事実は真摯に受けとめ授業改善に望みたいと思う。

今後も継続的に調査を行うとともに、調査データのより詳細な分析については今後の課題とする。

注

- 1 岡田龍樹「大学生のキャリア意識の育成-授業「キャリア・デザイン」の効果分析」『天理大学生涯教育研究』第13号, pp.13-20.
- 2 梅澤正『大学におけるキャリア教育のこれから』学文社, 2007年, pp.74-78.